

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：32202

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23015

研究課題名（和文）井筒俊彦の言語論における想像力の問題

研究課題名（英文）The problem of imagination in the linguistic theory of Toshihiko Izutsu

研究代表者

小野 純一（Ono, Junichi）

自治医科大学・医学部・講師

研究者番号：20847090

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：井筒俊彦は初の英文著作『言語と呪術』で、意味の内在的な側面を生物学、人類学、心理学、言語学、論理学、哲学の当時最新の理論を用いて論じる。彼は伝達や指示としての心的働きが外在化する前の心的過程を意味構成として記述する。また彼は、外在化される前の意味形象が、心象・想像として認識を規定し、外在化されない意味は心象喚起機能・想像力の基礎となると捉える点も判った。また講義ノートと比較し、井筒がソシュールの伝達・指示の記述を批判し、ベルクソンの記憶イメージを導入したと判った。ベルクソンは言語を記憶イメージが一般観念になる前の水準に定位するが、井筒は言語生成の場を意味の内在的な構成過程に見ると判った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は『言語と呪術』が、伝達や指示ではなく、心的過程としての意味構成を記述することを示した。歴史研究として次の二点が挙げられる。第一に、中期井筒がアラビア語の意味連関を記述するにあたり、その方法論的立場として意味構成を心的過程としたことが判った。第二に、中期から後期にかけて井筒は、意味構成の間主観的側面を探究するが、その出発点も『言語と呪術』と言語学講義ノートから判った。これによって、日本思想史の一角をなす井筒の言語思想の形成が実証的に示された。体系研究としては、想像力を言語的意味の出現に捉える独自の立場が示された。これは多様な人間活動の基礎をなす想像力の意義を基礎付けるものだと言える。

研究成果の概要（英文）：I analysed Toshihiko IZUTSU's first book in English, Language and Magic. It turns that he discussed the semantic immanence, drawing on the theories of his time, including biology, anthropology, psychology, linguistics, logic and philosophy. I drew on his argument that the semantic configuration emerges as a mental process prior to the externalisation of mental acts as communication or indications. It also turns out that his main claim is that the semantic images coordinates cognition before it is linguistically externalised, and that they constitute the imagination internally, together with semantic units that are not externalised. In his lecture notes I found out the following: 1. Izutsu criticized Saussure's description of communication and indication, and introduced Bergson's memory-imagery. 2. Bergson locates language at the level before memory-images become general notions, while Izutsu considers the place of language generation to be the internal configuration of meaning.

研究分野：哲学

キーワード：言語論 想像力 井筒俊彦

1. 研究開始当初の背景

20世紀の日本を代表する哲学者・井筒俊彦は独自の哲学的意味論によって特徴付けられる。21世紀になって、これまで知られていなかった日本語の著作を含む全集の刊行が完了し、また日本ではほぼ紹介されてこなかった英語著作のうち主要なものが和訳された。その結果、徐々に、彼の業績の全体像が明らかになりつつある。だが、彼の学術活動の根幹をなすと自ら称する哲学的意味論がいかんして形成され、何をどう解明し、いかなる意義と可能性を持つかは、これまで詳細には論じられていない。そこで本研究は、これまで論じられることのなかった井筒による最初の英語著作『言語と呪術』、およびその前段階で行われた「言語学概論」を後の哲学的意味論の観点から併せて論じる事にした。とりわけ『言語と呪術』で、井筒が想像力（イメージ喚起機能）に関わる内包的意味をどう捉えたのかに集中する。なぜなら晩年の言語論でも想像力（イメージ喚起機能）が主題になっているからである。本研究の代表者は『言語と呪術』の日本語訳を行い、これについて論文を刊行した。そこで次の段階として、晩年までの変化を見据えながら、井筒自身の学問的形成の初期段階を記述する必要があると考えた。なぜなら、このような形で、井筒思想の全体像を描き出すための基礎研究を行い、また彼を日本思想史に位置付けるための資料も提供できるからである。同時に、この研究は体系研究として、言語と想像力の関係をめぐる考察に寄与できると考えた。なぜなら、現代哲学においては、言語の問題から想像力を解明する作業が現象学を中心に行われているからである。これが、本研究を開始するにあたっての問題意識の背景をなす研究状況および論点である。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、以下の通りである。井筒俊彦の言語論『言語と呪術』における内包的意味の現象学的・言語学的記述を批判検討し、同時にこの著作にまとめられる前段階をなす言語学講義のノートから、意味の内在性に関する記述を引き出し、相互参照することで、初期の立場を明らかにすることである。井筒による意味の内在性に関する記述する作業は、歴史研究の一環としては、以下の点を目指して行われる。第一にこれは、言語と想像力の観点から、井筒俊彦の思想の史的記述を行う歴史研究に基礎を提供することを目指す。第二にこれは、初期思想と、この書物以降の中期井筒が行なったアラビア語研究や、イスラーム思想、仏教思想、中国思想などの思想文献研究とどのような関係にあるのかを考察するために行われる。第三にこれは、この観点を基礎付けることで、井筒の活動の初期から中期、さらに後期にかけて、一貫した問題意識が維持されながら思索が進展して行くことを描き出すために行われる。また本研究は体系研究の一環として、現象学やその問題意識を受け継いだ現代哲学の他の流れの中で、盛んに考察されている想像力と像の問題を意味生成の側面から描き出すことを目的とする。これによって、井筒を特徴付ける独自の哲学的意味論がいかなるものであり、いかなる意義を有し、いかなる可能性を持つか示すとともに、想像力において言語的意味がいかに作用しているか明らかにする。この手順を経ることで、本研究はまた、イスラーム学者として見なされてきた井筒が、実際にはイスラーム思想研究をその一部とする言語的意味の記述を主として行なった思想家であることが示せると考える。そして、その観点から、井筒を日本思想史に位置付けることを本研究は見据えている。

3. 研究の方法

研究方法としては、テキスト分析および内在的解釈を採用する。第一に、『言語と呪術』における内包的意味の四種類をまとめる。第二に、内包的意味の記述を想像力の観点から記述し直す。第三に、「言語学概論」ノートから内包的意味に関する記述および外在化に関する記述を、意味の間主観性として論じられている部分に特化して確認する。第四に、1950年代末から始まる意味論的分析が『言語と呪術』の理論化を挟み一貫して展開されるのを示す。

上記の四段階における分析を前提として、ソシュール言語学の批判を行うために、井筒がベルクソンの記憶論を参照していることを比較検討する。とりわけベルクソンの『物質と記憶』におけるイメージ論との比較を行う。この比較研究によって、井筒がベルクソンを援用していること、およびベルクソンのイメージ論とは異なる意味構成を主眼とするイメージ論を提唱することを提示する。さらにカッシーラーおよびランガーからの影響、およびその象徴理論を主として意味イメージの記述へと援用することを示すために比較研究を行う。

続いて、『言語と呪術』以降のより新しい言語学・論理学・言語哲学の知見・学術成果を参照することで、初期井筒の言語論が持つ特徴や独創性を描き出す。これは研究方法としては、外在的解釈を採ることで、井筒の思想を思想史に位置付けるためである。井筒がのちに試みようとするように、概念の意味連関を描き出した九鬼周造、さらに井筒と同じく意味の問題をラテン中世論理学におけるsuppositio（代表）に着目して論じた山内得立との比較を行うことで、井筒を日本思想史に位置付ける。また井筒が意味フィールドの観念を借用したドイツ意味論との比較のほか、ベルクソンのイメージ論を展開したドゥルーズとの比較を行うことで、現代哲学・思想の中での井筒の位置付けを検討する。

4. 研究成果

『言語と呪術』が、意味の内在主義をとること、それがこの書以降のすべての研究の方法論的立場を打ち出したものであることが判った。内在主義的な意味理解に関しては、井筒が言語の伝達や指示においても、また認識においても、すなわち外界に意味と対応する対象がある場合にも、内在的な意味形象が、それらの作用を成立させると考えることが判った。このことから、中期の英文著作のほか、晩年の『意識と本質』などの日本語の著作群でも繰り返し述べられる点であり、終始一貫した立場で意味を論じていることが比較により示せた。

第一に、井筒の記述に通底する立場は以下のような点にまとめられる。すなわち、意味形象が指示対象と対応するときに伝達・指示・認識が成立し、意味形象の非顕現と引き換えに伝達・指示・認識の充足すなわち外的対象が顕現し、この非顕現性ゆえに、意味の外在主義を取る立場からは、意味形象が、あるいは意味の内在性が否定されている。これに対して井筒は『言語と呪術』において、指示が機能する場合、指示対象が不在である場合、指示対象が知的構成である場合を分析し、意味形象の介在を証明する。指示対象が実在するけれども、発語の瞬間には現前しない対象である場合、内在的に意味形象が形成され、内的構成を語が指示することが示される。井筒は、このような事態を意味の内在性とみなして、対象が不在ながらもそれについて語ることができるという、人間知性の非経験的な記号的思考の基礎をなすと述べる。また、実在対象のない知的構成が、心象を形成することからも、意味の内的構成としての内在性を証拠付ける。これに加えて、シャーマンなど宗教体験や詩的体験において、非経験的な形象世界が展開すること、意味の内在性の例として記述する。この点から、井筒が『言語と呪術』の末尾で、アラビア語の意味構造を根本から書き換えることになったイスラームの預言現象を取り上げることが理解できる。アラビア語の重要語彙は、預言現象によって、正反対の意味すら持つようになった。中期の井筒は、アラビア語の語彙のこういった意味変化を、クルアーンの成立前夜から成立の期間を経て、さらにその後の展開に至るまで記述する。これは『言語と呪術』で「内包の網」とした意味形象の連関をアラビア語で実証したものである。この活動もまた、『言語と呪術』の方法論を実証研究へと展開したことが判る。このアラビア語の意味フィールド研究で意味の内部構造を記述する際、井筒は九鬼周造が描いた語彙連関としての世界観の記述をさらに進展させていると思われた。そのために基礎を『言語と呪術』は、このような実証研究に向かうための方法論として提示するという点から、現象学を導入した九鬼と意味の現象学的記述を目指した井筒とに共通する基盤と手法が見出された。この方向で、井筒を日本思想史に位置付けうる。本研究がその基礎を提供できると考えられる。

また、本研究は慶應義塾大学言語文化研究所にコピー所蔵されている言語学講義のノートを調査し、村上博子による1950年代前半のノートのうち、1951年と1952年の二冊のノートから以下の事実を確認できた。1951年のノートには、井筒が後に、プロティノスや華嚴仏教、存在一性論などの思想（部分が全体と一致するという観念）の記述・図式に対応する図像があり、井筒はそれによって意味記号のあり方、意味分節を示していることが判った。この時点の言語論においてすでに、一つの語の意味が確定されるのには語彙全体が関わる、という点を基本にすることが判った。1951年のノートで井筒がベルクソンに依拠しながら、ソシュールによる伝達言語の記号学的な分析を批判する部分（これは晩年まで繰り返される）、井筒はパロールの中にラングが現れると指摘する。つまり、語の中にラング全体を見ろという井筒の思想が、この段階で成立していることが判る。今回の調査で判明したうち、井筒の言語とイマージュとの関連で重要となるのは、1952年のノートにおいてベルクソン『物質と記憶』における「記憶の円錐」の図を借用した逆円錐の図により、ラング全体が収縮して語となって、パロールの中に現れるという運動が示されている点である。これは、1951年の批判を意味生成の構造分析に進めた結果と言える。これを井筒は「生命の場に語がおりること」すなわち「代表 (suppositio)」と呼んでいることが判った。ここから山内得立の言語哲学や前田英樹の言語論に先駆ける理論であることが判った。意味をsuppositioとする点から、井筒言語論はドイツ意味論のその後の流れとも対応するだけでなく、日本における議論の流れとも交差することが判った。この点からまた、本研究は思想史へ井筒を位置付ける基礎を提供できると考えられる。

井筒の初期の著作群から、また部分的には後期の著作群から、井筒の思索にはベルクソンの影響が少なからずあることが判った。言語論としては、井筒はソシュール記号学を乗り越えるためにベルクソンの記憶イマージュの議論に依拠していることも判った。したがって本研究は、井筒思想の進展、彼の意味論を思想史に位置付ける根拠、および彼の議論イマージュ論として捉える解釈のための基礎資料を引き出すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小野純一
2. 発表標題 イランにおける古典哲学の教育について
3. 学会等名 「大学と宗教」研究会（第3期）第5回研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野純一
2. 発表標題 井筒の内包=心象世界論
3. 学会等名 European Network of Japanese Philosophy（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野純一
2. 発表標題 スフラワルディーにおける照応 天使論にむけて
3. 学会等名 日本宗教学会 第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野純一
2. 発表標題 イブン・アラビ-的の夢 = ヴィジョン体験の基底構造
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野純一
2. 発表標題 井筒俊彦とスフラワルディー哲学
3. 学会等名 「井筒・東洋哲学の展開に関する比較宗教学的検討」第4回研究フォーラム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関